本人との交流を通して、人との信頼関係を築き生活の安定を図る

社会福祉法人嬉泉　おおらか学園
谷田　さつき

（人間関係）

１．目的

Ａさん（知的障害を伴う自閉症で 20 代後半の男性）は以前の施設において、周囲の刺激（聴覚・視覚）に翻弄されて不安が高まると顔を叩くなどの自傷行為につながりやすく、また、こだわり行動が消化できないと椅子を投げる、壁を蹴る、人を引きずりまわすなど対応が困難であった。そこで、服薬調整のために病院へ入院した後、退院してから本学園に入園してきた。

Ａさんの特徴として、フラッシュバックも多くその言葉の意味を理解することが困難な場合があり、Ａさんの発する言葉に応えていかないと、何度も繰り返して言いつのり最後は大声を出して目に留まった物を投げて解消しようとする様子もみられた。

２．実践内容

そんなＡさんに対して、まずはＡさんの理解を深めていくとともに、Ａさんが安心できる関係性を築いていくために、支援員が個別についてＡさんの行動の意味や気持ちの流れを細かく見ていき、まずは受け入れていくようにした。

例えば、Ａさんは「人との握手」「持参してきた洋服を全部着替える」「手を洗う」「飲み物を何度も要求してくる」など、いくつかのこだわり行動がパターン化され登園直後からそのルーティーンで行動していくことが日課となっていった。「握手」に関しては、人との順番も決まっておりその職員がいないとずっと探しまわるという様子が見られた。

また、着替えをするためにわざと失禁をして洋服を汚す、そして飲み物の欲求については他者と同様の提供では納得できずに、Ａさんの飲むタイミングや状況が異なると再度要求してくることが多かった。

そのことに関して「△△さんは、今はいないので」とできないことを言ったり「もう飲みましたよね、〇〇してから飲みましょう」と今は飲めないというような否定的な対応になったりすると、椅子を投げる、壁やドアを叩いて壊す、他者を叩くなどの派手な行為で欲求が叶わないことに対しての不安や不満を表現してきた。

そこで、Ａさんのこだわり行動の意味がどこにあるのかを追ってみていくと、周囲の刺激を拾って自分の行為へと繋げてしまい、それがＡさんにとっては不快な要素となって時には恐怖へと繋がってしまうことが分かった。その「怖い」「不安」という気持ちが大声になり自傷になっていくことを「静かに」「やってはいけない」と押さえつけられてしまうことは、Ａさん自身どうしていけばいいのかわからないでいたのではないかと考えられた。

そのようなＡさんに対して、精神科医から「対立的にならない方がよい」という見立てのもとで、できる限りＡさんの行動を認めていき、派手な行動に関してもＡさんが不安であることからの行動と受け止めていくようにしていった。

３．結果

そうしていくことで、Ａさんの人に対しての行動に変化がみられた。

例えば、「握手」については、「ちゃんとできるから〇〇とここで待っていましょう」「今、〇〇さんは仕事しているからすぐに来られないけど電話して呼んであげますから」とすぐにできなくても「できる」ことを保障していくことで、その支援員の話を聞いて待つことができるようになった。

また、以前は叶わないという思いが先行してすぐに物を投げることに繋がっていたことが、まずはＡさんを担当している支援員に自分の思いを告げて叶えてほしいという気持ちが育ってきて、自分の感覚の中で発散解消しようと苦悩しているところから脱する糸口が見えてきているのではないかと思われる。

４．考察と今後の課題

今後も、Ａさんが人を頼りにして、自分の中で起こりうる恐怖や不安を軽減していけるような人間関係を築いていくことが優先であると考える。そして、その人間関係が信頼へと繋がっていくときにＡさんの欲求に対して「人との交流」が必要になってくると考えている。

＜助言者コメント＞　　森田　規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

障害の重いＡさんが学園への通所を始めてまだ約１年８ヶ月だそうですが、Ａさんの行動に添いながらＡさんを支えていくという基本的なかかわりを丁寧に積み重ねられた様子がよくわかります。このようなかかわりを私はＡさんとの学習の積み重ねと考えます。そしてＡさんが握手の相手を自分で順番を決めて行動することにつながってきたと思います。障害を抱えてお薬を飲みながらの生活は、Ａさんにしかわからない大変さや辛さがあると思います。でも、自分の行動を支えてくれる学園の生活には、行動して「ほっとした」「うまくいった」とＡさんが思う瞬間がきっとあると思います。ただ、Ａさんの表現が微かだったりすると周りの方々は気づかないかもしれません。障害の方との関わりは、悩みながら時間を積み重ねる困難なお仕事だと思いますが、だからこそ「そういうことだったんだね」と一緒に何か掴んだ時の喜びは特別ではないでしょうか。

これからも少しずつ工夫を積み重ねながら交流が前進されるよう期待しています。